

栽培種目：タカミレッド

## タカミレッド栽培再挑戦

チーム名：タカミレッドはこれでおしまい

氏名：佐々木甫（代表）、加瀬雄也

### 〈要約〉

昨年のメロン栽培後、公益財団法人園芸植物育種研究所の越智科長からメロン栽培の話を聞く機会があり、再挑戦することにした。しかし、今年のタカミレッドは、2株で1個食したがメロン特有の糖度がない。他は、全てばら色カビ病に侵された。



写真-1.食したタカミレッド

### 1. タカミレッド栽培管理方法

タカミレッドは畑で完熟させたものを食することが目標であり、栽培仕様は越智科長の方法を参考に図-1の栽培仕様とした。

- 昨年と同様に、黒マルチ+裾開きビニールトンネル+寒冷紗の覆いの仕様とする。
- 子つる2本立てで孫つるに4個の果実、2株植え付ける。合計8個。
- 授粉はビニールトンネル+寒冷紗であり、人工的におこない、授粉成功を確認して授粉日を記

録し、午後10時ごろに作業する。果実肥大時の水やりに留意する。

- 畑での完熟で、収穫適期を葉の色抜け・授粉後55日、離層を確認後収穫する。

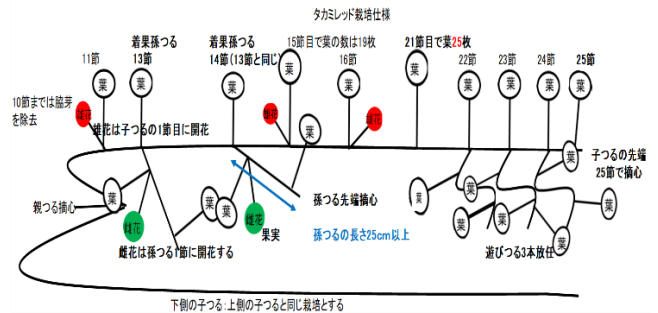


図-1.タカミレッドの栽培仕様（越智科長のメモから）

### 2. 栽培経過

① 畝の植え付け 5月30日：畝には牛糞堆肥と少量の化成肥料を全面散布した畝に、黒マルチと裾開きのビニールトンネルと寒冷紗で覆う。棒状温度計で地表面下20cm下の温度18℃以上を確認して、2株を70cm間隔で植え付ける。



写真-2. タカミレッド2株植え付けた

② 子つる2本立て完成 6月17日：3日に親つるを摘心し、2本立てを完成、子つるが順調に生育してきた。子つるは10節目までの脇芽を葉1枚のこしてすべて摘除する。また、子つるのルート短棒やUピンでジグザクに誘導し始める。



写真-3. 南側の株、2本立て完成

③ 着果枝の確認 6月26日：目印として、子つるの10節目にピンクリボン、着果枝とする13節目に赤リボンを設置した。

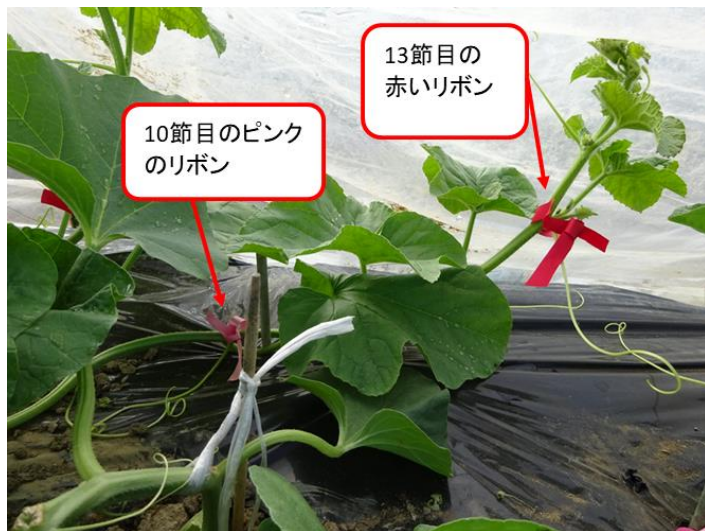


写真-4. 北右側の子つる

④ 孫つるに雌花を確認 6月30日：13節目以降の孫つるに雌花を確認

⑤ 人工受粉 7月3日：13～14節目の孫つるの雌花に人工授粉を7/6(月)に5か所おこなった。授粉時の雌花は花卉が開いているものではなく、しおれていた。しおれた雌花や開花前の雌花を挟みで切り分け強引に授粉した。また、子つる先端の25節目で先端を摘心し、子つる22節から25節の孫つる

は遊びつるとした。着果つるは予備を含めて13節目から16節目までの孫つるは残しており、孫つるの着果が2か所確認できれば、他の孫つるはすべて除去した。

⑥ 人工授粉成功 7月9日：3か所の果実を確認し、授粉の成功は3/5であった。2個はすでに黄色で失敗です。なお、成功した果実は、子つるまでの着果枝の長さが33～34cmであった。



写真-5. 北右側の子つる14節目

⑦ ばら色カビ病 8月16日：病害

写真-6の北右側の子つる14節目の果実(直径16cm)は人工授粉後41日目であり、越智科長によると肥大終了時期となりこれから糖度上昇となる時期であった。リング状の離層は、確認できなかった。着果孫つるの葉の色抜けは確認できたが、高温・多湿のためさまざまな葉がしおれていた。



写真-6. 北右側の子つる14節の果実収穫時(8/16) 果実の下には写真5のようにしていたが果実下側から、写真-7のようにばら色カビ病\* (不完全菌類：トリコセシウム属菌)に侵されていた。スプーンで食



してみたが、糖度は低く、苦みがあった。



写真-7. 同上の果実を半切りした写真

\*ばら色カビ病：病害虫の情報基地の「メロンのばら色カビ病」によると、主に収穫間近の果実に発生するが、出荷先で発生することもある。果実の尻の部分や、ネットのカルス形成が遅れた部分から病原菌が侵入し、しみ状の病斑を形成するとともに果実内部は腐敗する。メロンは菌の発育を抑えるためにクルピタシン（ゴーヤの苦み成分）急増させる。

### 3. 結果（食した果実は南側左株子つる 18 節）

果実は下側からばら色カビ病に侵されていたので、手製ネットで写真-8 のようにつるした。



果実円周表面凹凸

写真-8. 収穫時の果実、リング状の離層

南側の左子つる 18 節目の食した果実の経過実績

- 人工授粉：8月10日（経過日数0日）
- 肥大化開始：8月13日（同3日）
- 水やり1日5ℓ1回：8月26日（同16日）
- 肥大終了（水やりなし）：9月9日（同30日）
- 果実収穫：10月4日（55日）
- 食した日：10月6日（57日：写真-1）

果実は直径 17cm の円形であるが、円周表面に凹凸があり、手製ネットの網目も出ていた。果実とつると

の境界には円形の離層が確認でき、つる周辺も全体にしておれていた。

## 4. 考察とまとめ

### 1) 考察

今回のメロン栽培は失敗であり、考察するところはないが、メロンの肥大期の急成長にはビックリした。肥大率と経過日数の関係図を園芸植物育種研究所のデータと比較したものが、図-2 である。

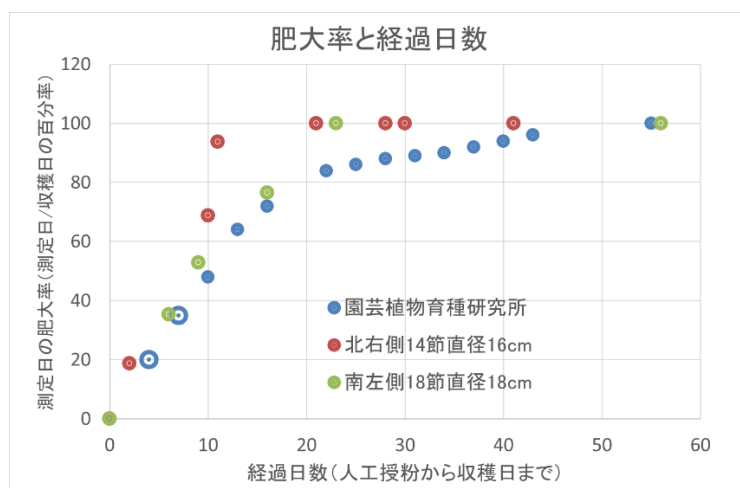


図-2. 肥大率と経過日数の関係図

肥大は人工授粉後の初期 20 日間で 80%まで完了し、肥大の傾向は研究所のデータとほぼ同じであった。肥大初期の水やり量が、いかに重要であることが理解できた。

### 2) まとめ

- 13 節目の孫つる位置をリボンなどで目印を付ける。人工授粉は晴天時におこない成功させる（実際には7月の梅雨空）。失敗すると葉が繁茂して、着果した孫つるの先端のを見つけ出しが困難となる。果実つるも葉1枚を残して孫つる先端を切除する必要がある。
- 肥大初期の水やりは4ℓ必要と指摘されたが、その量に恐れをなし、ほぼ2ℓ程度とした。果実円周表面が写真-8のように凹凸になった。
- 昨年と同様に透明ビニール+寒冷紗でトンネル栽培した。果実下には紙皿と緩衝材を設置したが、網目の亀裂からばら色カビ病に侵されたので、写真-8のようにトンネル支柱から釣り合下げた。それも吊り下げた位置が高いと、果実が蒸れてばら色カビ病に感染した。地面からすれすれの位置につるしたのが、写真-8の果実である。